第5回国語分科会国語課題小委員会・議事録

平成28年10月7日（金）
10時00分～12時00分
旧文部省庁舎・文部科学省第2会議室

〔出席者〕

（委員）沖森主査，森山副主査，秋山，石黒，入部，川瀬，鈴木，関根，田中納屋，やすみ，山田，山元各委員（計13名）
（文部科学省・文化庁）岸本国語課長，鈴木国語調査官，武田国語調査官，小沢専門職ほか関係官

〔配布資料〕

- 1 第4回国語分科会国語課題小委員会・議事録（案）
- 2 山元委員御発表資料
- 3 関根委員御発表資料
- 4 平成27年度「国語に関する世論調査」（報告書）（委員限り）
- 5 平成27年度「国語に関する世論調査」の結果の概要

〔参考資料〕

- 1 円滑なコミュニケーションとは（福田委員提供）
- 2 「国語分科会で今後取り組むべき課題について（報告）」（平成25年2月）において未検討の課題の協議で出された意見の整理（平成28年9月まで分）
- 3 国語課題小委員会における審議スケジュール（案）

〔机上配布資料〕

- 国語関係答申・建議集
- 国語関係告示・訓令集
- 国語分科会で今後取り組むべき課題について（報告）
- 平成27年度「国語に関する世論調査」に関する新聞記事

〔経過概要〕

- 1 事務局から配布資料の確認が行われた。
- 2 前回の議事録（案）が確認された。
- 3 事務局から配布資料4及び5に基づき，平成27年度「国語に関する世論調査」の結果について説明があり，説明に対する質疑応答が行われた。
- 4 山元委員から配布資料2「山元委員御発表資料」について説明があり，説明に対する質疑応答が行われた。
- 5 関根委員から配布資料3「関根委員御発表資料」について説明があり，説明に対する質疑応答が行われた。
- 6 山元委員，関根委員の説明を踏まえ，意見交換が行われた。
- 7 第2回国語分科会における国語課題小委員会の審議についての報告は，主査一任とすることが了承された。
- 8 第6回国語課題小委員会について，平成28年11月25日（金），午後3時から5時まで文化庁特別会議室で開催することが確認された。また，第2回国語分科会について，平成28年10月31日（月）午後3時から5時まで3F2特別会議室で開催することが確認された。
- 9 質疑応答及び意見交換における各委員の発言等は次のとおりである。

○沖森主査

本日はまず、先日発表された平成27年度「国語に関する世論調査」の結果についての報告をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

○岸本国語課長

それでは、私から先月9月21日に公表いたしました平成27年度「国語に関する世論調査」の結果の概要について、できるだけ簡潔に御報告いたします。冊子本体（配布資料4）と、概要の資料（配布資料5）がありますが、基本的に配布資料5の概要を使って説明させていただきます。

「国語に関する世論調査」ですが、平成7年度から毎年実施をしております。平成27年度の調査に関しては、16歳以上の男女3,589人を対象とし、調査を実施しております。

27年度の調査項目ですが、大別して六つの事柄について聞いております。順に御説明したいと思います。

2～3ページ目に関しては、言葉への関心、言語観について聞いております。

まず、「毎日使っている日本語を大切にしているか、していないか」という点についてです。これにつきましては「大切にしていると思う」という選択肢と、「余り意識したことはないが、考えてみれば大切にしていると思う」という選択肢を選んだ人を合わせた「大切にしている」合計は78.5%となっており、過去の調査結果と比較しても増加傾向にあります。年齢別に見ると、年代が高いほど「大切にしている」と回答された方の割合が高くなる傾向があります。

「美しい日本語」があると思うか」という問いにつきましては、「あると思う」が90.8%となっており、過去の調査結果と比較すると増加傾向にあります。

「美しい日本語」と考えられるものを具体的に選んでいただいた結果が、3ページ上段です。多い順に「思いやりのある言葉」、「挨拶の言葉」、「季節の移り変わりを表す言葉」となっています。

「どのような言葉に出会ったとき、心と心を結ぶ言葉の大切さを感じるか」を聞いてみますと、多い順に「地域や職場で、気持ちよく挨拶をし合うとき」が50.6%と最も高く、次いで「山道などで行き会った者同士が、「こんにちは」などと声を掛け合うとき」、「相手と十分に話し合っ、お互いに理解し合えたとき」という順になっています。過去の調査結果と比較して増えているのはどの選択肢かと言うと、もう少し踏み込んだ、「仲間などから「無理しないで休んでください」と気遣われたとき」、「季節の挨拶や安否を気遣う手紙をもらったとき」、「失敗をとがめず、「大丈夫、気にしないで」と慰められたとき」といった自分への深い気配り、思いやりなどを受け取ったときを選ばれた方が増えています。

4～8ページ目までは、「場面ごとの敬意表現」について、具体的な場面を取り上げて、どういった表現をするかということ聞いています。

まず、総論的に、今後の敬語の在り方について聞いています。問4ですが、これからの時代の敬語の在り方について、「新しい時代にふさわしく、敬語は簡単で分かりやすいものであるべきだ」と「敬語は伝統的な美しい日本語として、豊かな表現が大切にされるべきだ」のどちらの考え方に近いかを聞いています。これについては、「伝統的な美しい日本語として豊かな表現を大切にすべきだ」を選ばれた方が64.1%となっており、これも過去の調査結果と比較しますと増加傾向にあります。

その下からは、具体的な場面を挙げて敬語を使うべきかどうかを聞いています。

まず、問5は、中高生が担任の先生に対してどういった場面で敬語を使って話すべきか。授業中から始まりまして、五つの場面でそれぞれ聞いております。授業中と休み

時間に学校の廊下で話すときとでは、敬語で話すべきだという割合が少し違っていますが、全体として敬語で話すべきだと考えている回答者が多く、過去の調査結果と比較しますと、増加傾向にあります。

5 ページ目の上段、「会社に勤めている人が、上司に対してどういった場面で敬語を使って話すべきか」という問いです。これも会社での仕事と、例えば、仕事の後、二人で飲みに行った酒場で話すときとでは、敬語を使うべきだと回答した方の割合は少し違いますが、過去の調査結果と比較しますと、全般的に敬語を使うべきだと考えている方が増加傾向にあります。

5 ページ目の下段、「配達の人に対して何という言葉が掛けますか」という問いですが、「ありがとう（ございました）」がほぼ5割、48.2%と最も高くなっております。過去の調査結果と比較すると、「ありがとう（ございました）」が増えて、「御苦労様（でした）」が減る傾向にあります。

6 ページ目、仕事が終わったときに何という言葉が掛けるか。これは相手の職階が上の場合と下の場合で分けて聞いております。目上の人、目下の人で少し割合が違います。過去の調査結果と比較すると、「お疲れ様（でした）」が増えて、6割、あるいは7割以上は「お疲れ様（でした）」という言葉を選んでいて、「ご苦労様（でした）」は減る傾向にあります。

次は、同年輩の相手に対してある人を知っているかどうかをどのように聞くか、という問いです。一番丁寧な「御存知ですか」という表現を選ばれる方が多く、過去の調査結果と比較すると増加傾向になっています。

7 ページ目、部下が課長に呼び掛けるとき、どの呼び方が一番望ましいか。これは、役職名の「課長」を選ばれた方が一番多いですが、そのほか「名字に「さん」を付ける」、「〇〇さん」という呼び掛けも増えています。

次に、会社の受付の人が外部の人へ、自分の会社の課長のことを話す場合、一番どの呼び方が良いと思うかという点については、名字の呼び捨てで「鈴木は…」という呼び方を選ばれた方が一番多かったという結果になっています。

8 ページ目、学校の先生、あるいは病院の医師が、それぞれ保護者なり患者に対して同僚のことを話すときの一番良い言い方を聞いています。いずれも「〇〇先生」という言い方を選ばれた方が一番多いという結果になっています。

9 ページ目以降は、「情報化の中でのコミュニケーション」について聞いています。

まず、「毎日の生活に必要な情報を何から得ているか」ということですが、順にテレビ、新聞、携帯電話を選ばれた方が多くなっています。過去の調査結果と比較すると、新聞やチラシ、ビラ、雑誌、本や辞典といった紙媒体の情報源は減少傾向にあり、携帯電話が非常に大きく伸びているという結果になっています。

「言葉や言葉の使い方による大きな影響を与えるものは何だと思うか」という問いについても、テレビ、新聞、携帯電話という順番になっています。

10 ページ目、携帯電話の使用対応について聞いております。電車やバスの中での通話と、対面で話をしている最中の画面閲覧、携帯電話操作についてどう感じるかということ聞いています。いずれも「不愉快に感じる」と、「どちらかと言えば不愉快に感じる」を合わせた「不愉快に感じている」を選ばれた方が8割近くという結果になっています。年齢別に見ると少し差がありますが、電車やバスの中での通話については、60代が比較的寛容であると出ておりますが、それ以外の年代については余り差がないのですが、11 ページの右側、上の段で「対面で話をしている最中の画面閲覧や操作」に関しては、若い世代ほど寛容な傾向があり、例えば、16～19歳では、1割ぐらいの方が「何の問題もない当然の行為だと感じる」あるいは「何とも思わない」を選んでいきます。

同居家族・親族、別居家族・親族、友人、仕事上の知り合いの四つに分けて、どのよ

うな方法を用いてやり取りをするか、コミュニケーション方法について聞いています。同居家族・親族については、直接会って話すというのが最も高いですが、その他、別居家族・親族から友人・仕事上の知り合いについては、携帯電話の通話が最も多いという結果になっています。

13 ページ、インターネットの利用状況について聞いています。これは「よく利用している」、「時々利用している」、「利用したことがある」を合わせた「利用している」は、73.1%となっています。これも年齢別に見ると結構な差があります。40代以下で見ると、紫色の点線ですが、利用される方が9割以上となっております。これが70歳以上になると非常に低くなり、利用したことがないという選択肢を選ばれた方が75.8%と、全体の4分の3の方は利用したことがないという状況になっています。

14 ページ、インターネットをどのように利用するかということ聞いてみると、一番多いのは「電子メールを利用する」で、78.4%となっています。ただ、その下から、「画像、音楽、動画等を閲覧・視聴する」、「ショッピングサイトや、オークションサイトを閲覧する」といった受動的な利用対応が多くなっております。能動的な利用対応としては、「SNSに投稿する」の17.7%が最も高くなっております。その他、「画像、音楽、動画等を投稿したり、公開したりする」も6.4%と、さほど多くはないという結果になっています。

14 ページ下段、「情報機器の普及によって、言葉や言葉の使い方が影響を受けると思うか」という問いに関しては、「影響があると思う」という方が大半、85.3%となっており、これも過去の調査結果と比べると、増加しています。

15 ページ、ネットスラングとか、絵文字などの利用状況について聞いています。1から4までのグラフで、それぞれの表現についての回答をまとめてあります。1番の「(笑)」などの感情を表す表現や、4番の絵文字と呼ばれる表現については、「見たことがある」という方が7割から8割はいらっしゃいます。「使うことがある」を選ばれた方も非常に多く、1番については4割、39.3%。4番については半数以上、56.1%となっています。2番目と3番目の表現については、5割以上の方は「見たことがない」、そもそも存在を知らないという結果になっておりまして、使うことがあると回答された方も非常に限定的な数字となっています。

16 ページ目以降は、「ら抜き」、「さ入れ」、「やる／あげる」といった、いわゆる言葉の乱れと言われるような表現の使用状況について聞いております。その表の中の1～5番目までが「ら抜き」言葉について。6～10番目までが「さ入れ」言葉、ただし、9番目の「見せて」－「見させて」はどちらも文法的に問題のない形で「さ入れ」ではありません。11～13番目までが「やる／あげる」についてとなっています。この中で4番目と5番目、「今年は初日の出が見られた」ではなくて「見れた」と言う、そして、5番目「早く出られる」ではなく「早く出れる」と言う方を選ばれた方が、「ら」を入れた表現を選んだ方よりも多かったということで、この点は広く報道されたところ です。

11～13番目までの「やる／あげる」の表現ですが、これも12番目の「うちの子供におもちゃを買ってやりたい」ではなくて「買ってあげたい」を選んだ人の方が、今回が初めてというわけではないですが、非常に多くなっています。

そして、全体的に経年で比較をすると、「ら抜き」と「あげる」表現を使う割合は増加傾向にありまして、年齢別に見ると若い年代ほど「ら」抜き、そして「やる」ではなくて「あげる」を使う傾向があります。

「さ入れ」ですが、全体的に見ますとまだ「さ」は入れない本来の表現を選ぶ方が多いのですが、19ページの下を御覧ください。問1の「日本語を大切にしているかどうか」の回答とクロス集計をしてみると、「日本語を大切にしている」という選択肢を選んだ人ほど「さ」を入れる傾向があることが分かります。

20, 21 ページは、「言葉に対する感覚」ということで、具体的に六つの表現を選び、どちらの意味合いで使っているかというのを聞いています。この中でどちらも比較的使われているのが、2 番目の「こだわる」という表現です。「過去のことにこだわっている」、「食材にこだわる」、これはどちらも使われています。経年比較で見て、とても大きく減っているのが、1 番目の「恐ろしさに鳥肌が立った」という表現です。それよりは「すばらしさに鳥肌が立った」が増えています。そして、3 番目の「悩ましい目つきで誘惑する」も減ってしまっていて、「AかBかの選択は悩ましい問題だ」が増えているという結果になっています。

22 ページ目、和語・漢語と片仮名語のどちらを使うかということを経験的用語と文化・スポーツの用語に分けて聞いています。まず、問 23、日常の用語については、片仮名語が比較的浸透していて、片仮名語の方が圧倒的に使われているのが、「ワイン」、「スーツ」です。和語・漢語については、比較的使われているのは「合計で」という表現と、「台所」という表現になっています。

問 24、文化・スポーツの用語に関しては、漢語が圧倒的に使われているのは、「エンターテイ(ン)メント」ではなくて「芸能」、そして、片仮名語では、「雪辱」ではなくて「リベンジ」を使う方が多いという結果になっています。

25 ページ以降は慣用句で、これは例年幾つか設定して聞いています。27 年度については「奇特」、「確信犯」、「琴線に触れる」、「名前負け」という四つの慣用句を取り上げ、どちらの意味として理解をしているのか聞いています。ゴシック体で記されているものが本来の意味とされている方ですが、この中で「確信犯」が本来の意味ではない方の意味で理解している方が圧倒的に多いという結果になっています。

27 ページは、音が似ている言い方です。この意味でどちらの表現を使うかということ聞いております。「混乱したさま」を言い表す表現として、本来は「上を下への大騒ぎ」という言い方ですが、そうではなくて「上や下への大騒ぎ」であると思っていられる方が多くなっています。また、4 番目、「眠りから覚めたときの気分が悪いこと」に関して「寝覚めが悪い」という言い方が本来の言い方ですが、「目覚めが悪い」を使う方が非常に多くなっています。

以上です。

○沖森主査

ありがとうございました。ただ今の御報告について、質問あるいは感想をお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。

○川瀬委員

世論調査ですので世の中の情勢を反映したものだというのは理解できるのですが、結果を見たときに、これは今の若い世代も含めてこういう傾向なのかということについて少し違和感がありました。もちろん、勘違いした言葉とか、「ら抜き」とか、さもありませんが、これだけの調査表に回答してくれる 10 代、20 代の考えが、今の日本人のスタンダードと考えていいのかというのが、今後のコミュニケーションというテーマを考える際、自分としてそこも含んで考えなければいけないのかなと思うのですが、いかがでしょうか。

○岸本国語課長

「国語に関する世論調査」は、今の日本の人口比に合わせた形で対象者を選んでおります。全体的に高齢化が進んでおりますので、10 代の方の対象者数は 60 代、70 代以上の方に比べると少なくなっています。つまり、こういう言葉遣いをするのか、こうあるべきだ、何が大事だと思うかということに関して、高齢者の意向と言いますか、動向

が非常に強く出る傾向があると考えています。それは今の日本人全体の平均であるかどうかは難しいところかと思いますが、人口構成を反映した形での考え方かと言われたら、そういうことなのだと思います。

○沖森主査

私から一つ。有効回答率がやや低いような気もするのですが、何か原因があるのでしょうか。

○岸本国語課長

これは非常に私たちも危機感を感じております。割と有名な調査であると自負はしているのですが、個人情報保護意識の高まりがありまして、よく分からない調査に答えたくない、知らない人の訪問に対してドアを開けたくないといった、安全への意識、危機意識が影響しているのだと思います。以前に比べると、すんなりと回答していただける方が少なくなってきたように感じております。したがって、予備対象者を増やしまして、転居、一時不在などでファーストコンタクトができなかった方に関しては、予備対象者の中から対象者を選んでその方にアタックするという形で、なるべく回収率を上げるよう努力しているのですが、なかなか上がるどころまでいかず、食い止めるという状態が続いております。何とかこれを改善できないかと、いろいろな調査の在り方を模索しているところです。

○沖森主査

調査員による面接聴取法なので、なかなか会っていただけないのは本当に困ったものです。趣旨を理解していただくということになるのでしょうか。

それでは、次に移らせていただきます。

前回、福田委員と田中委員に御発表をお願いしました。福田委員からは、参考資料1として、前回の小委員会での説明が不十分であった点を整理した「円滑なコミュニケーションとは」という補足資料が提出されております。

少しまとめておきますと、参考資料2の18ページの枠で囲まれた部分の要点にあるように、次のような御提案でした。コミュニケーション及びコミュニケーション能力の定義が必要であり、コミュニケーション能力については、「他者と全ての時間軸における共有した世界を構築するための道具、つまり話し言葉や書き言葉、非言語的行動を使いこなす力」と定義付けられるのではないかと。また、より良いコミュニケーションを実現するための方策として、自分のコミュニケーション能力をどうやって上げていくか考えてもらうための指針となる必要があると。他者意識ということに重点を置く必要がある。他者と共有するためには、他者に関する情報やワーキングメモリーなどに留意して言い換えのできる語彙や表現を豊富に持つことが求められる。こういった御提案であったかと思っております。

田中委員からは、同じく参考資料2の19～20ページの枠で囲まれた部分の要点にあるように、次のような御提案でした。共通語をみんなが使えるようになったことで方言の問題は終わったように見えるが、地域によって意識の差が大きく、コミュニケーションを考える上で終わった問題とは言い難い。現代は方言プレステージの時代となり、地域性と強く結び付いた伝統的な方言とは異なる機能を持つようになっている。発信者の地域性と切り離された話題の地域性や地域から切り離されたキャラ用法といったものが現れ、打ち言葉でのコミュニケーションにおいて、絵文字や記号などで気持ちを表すのと同様の役割を果たす、表現のリソースとして方言が扱われている。こうした方言の使用については、パーソナルな表現領域でもあり、かくあるべきということにはなじまないものではあるが、打ち言葉をはじめとしてコミュニケーショ

ンを考える上で考慮すべきであり、実態と意識の分析は必要であろう。以上ですが、田中委員、大体間違いでございませんでしょうか。今の説明について、何かお気づきの点がありましたら御訂正いただいで結構ですので、事務局に御連絡いただければと思います。

さて、本日は、事務局と相談しまして、違った観点からの御発表をお願いすることにしました。本日お二人の委員に発表していただきます。それぞれの御発表の後に質疑応答の時間を取り、意見交換はそれぞれの御発表が終わってから後でということにいたします。

では、初めに配布資料2に基づき、山元委員から国語教育の観点からコミュニケーションの在り方についてのお考えを御発表いただきます。お忙しい中、御準備くださり、ありがとうございました。では、よろしく申し上げます。

○山元委員

山元と申します。どうぞよろしく申し上げます。

まず、簡単に私の立場について説明いたしますと、私は国語教育が専門で、中でも学習指導要領で言いますと、話すこと・聞くことの領域について考えてまいりました。それで、幼児、児童、生徒の言語能力を育てることを念頭に置いて取り組んできた者です。スライドを御覧ください。ここに写真を載せたのは、コミュニケーション能力を育てるために、こんなことをやっているという自己紹介も兼ねてです。少人数で話し合いをするときに話をつないで広げるということを、糸を使って可視化したものです。ただのやり取りではなく、「絡むというのはこういうことだよ」と1時間ぐらいで授業して、その後この写真を教室に貼って、「ではみんな、心の糸をつないで話し合いましょ」とすると、これは1年生ですが、円滑な話し合いができる。そういう実践開発のようなことをやっております。ですので、日本語研究には大変疎く、文法などは苦手ですし、社会人の場合のコミュニケーションという視点が薄いので、子供を育てるという視点でお話をしようと思っております。そこを了解して聞いていただければと思います。

資料を基にお話をします。さて、もう10月になりましてそろそろ集約に向かわなければならないので、かなり雑っぽくなものですが、こうしたらどうかということをお話しします。内容は三つです。

一つ目は、前回からの話題でありました、コミュニケーション能力の概念を検討すること。二つ目は、その能力はどんなものなのかという内実を捉える枠組みを設定してみました。そして、最後に、その枠組みから導出される私どものゴールであります指針作りに向けて単純な提案ですが、させていただくという三つの柱でお話をします。

まず、コミュニケーション能力概念ですが、検討対象をどうするか考えました。スライド2ページ目を御覧ください。話す聞く活動、話し言葉、書き言葉、打ち言葉—これは、私は初めてここで聞きまして面白いと思いましたが、いろいろ対象がありますが、私の立場としては、話し言葉というよりは話す聞く活動、そして対面コミュニケーション—ネットコミュニケーションも案外今回の調査を見ていて大事なものなのだと思っはいるのですが、資料の上で○の付いたところに検討の対象を絞って考えていきたいと思ひます。話し言葉に三角を置いたのは、言葉の背後にある他者への配慮や認知、状況を読むといった面も大切に扱いたいためです。

コミュニケーション能力の定義ですが、配布資料に、1、2、3と三つ載せております。1が山元案で、2が王道を行く案。3が考えなければならないことということで、三つほど挙げておきました。

まず、定義1です。コミュニケーション能力というのは、「言語を介した他者との協同活動の中で、何かを共有・確認していたり、新しい考えを生み出したりする行為ができる能力」。行為というのは、言葉だけではなしにサインとか、ノンバーバルな部分

も含めた振る舞いを指します。目に現れて見えるところ。その背後にあるのが、能力。行為を営む能力ということで、言葉の規定をしております。

どうしてそう言えるのかという根拠ですが、四つほど考えております。この根拠などは子供たちの様子観察によるものです。特に小グループでの話合いの様子を見て、こうではないかなという調査結果などを踏まえながら、四つに考え及んでおります。

まずは、2番目の(2)、言語コミュニケーション能力を捉えるときには、「自己と他者の関係性の問題」を軸に能力の育ち等を見た方がいいのではないかと、ということです。前回、福田委員からも「他者意識」というファクターは見逃せないという御提案もありました。コミュニケーションは人間関係の問題だということは大方の同意を得られることだと思います。ですから、自己と他者という軸でコミュニケーション能力を捉えることが1点目。

それから、2点目、(1)ですが、言語コミュニケーション能力の中核には、「他者への共感が必要であり、それは共同体の中で他者と情動的一体感を持つことによって、より育っていく」ものだという立場に立っております。「共感」がキーワードかと思っております。それを育てる。意図的に育てようとしないと、これは育たないらしいのです。

(1)、それから、(3)にも関わりますけれども、コミュニケーション能力を育てるときには、その人の所属している共同体、学校で言えば学級、そういう学級の社会的振る舞いとか、社会文化が個人の中に内化していった育っていく、単なるスキルの問題ではないということを考えています。その一番中核としては、担任への信頼とか友達への共感力とかを育てることが大事だということです。

(4)ですが、「言語コミュニケーション能力を育てる上で目指すところを、地球規模の共同体社会の意識を持った市民性の獲得に置く。それは、その共同体をより望ましいものへと更新していかうとする資質の獲得を意味する。」ということです。

つまり、教育の立場から言うと、どこに向けて育てるのかというビジョンが必要です。そのビジョンをここに書かせていただいたわけです。その能力は因数分解すると、このようになるだろう、そして、それはこのように育つのだろうということを考えていきたいと思っております。

以上の内容を短く集約して表したものが、先ほど読みましたコミュニケーション能力の定義1です。

次は定義2です。これは私のものではありません。「いろいろな価値観や背景を持つ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、みずから深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力」。出典はそこに掲げておりますように、コミュニケーション教育推進会議の審議経過報告書です。そして、この定義は、中央教育審議会教育課程企画特別部会（言語能力の向上に関する特別チーム）の審議においても引用されているものです。そういう意味で、文部科学省で共有されている能力観です。私としても異論はなく、私の単純な定義をもっと詳しく言えばこのようになるのかという同意感を持った定義です。ただ、1点気になるのは、私が(4)に示しました、社会を人と共により良く形成・発展させていくというビジョン、ゴールを視野に入れた社会を人と共により良く形成する能力という視点は不要なのかなと思いました。ただ、ここに書かれてあるような能力を育てれば、結果として、それはできるようになるのかもしれない。

定義3です。平成25年度の国語分科会の報告で、コミュニケーション能力を二つの側面から捉えているものです。

一つ目は、対面コミュニケーションの場面において人間関係を形成する側面。もう一つは、自分の考えや意見などを整理し、根拠や理由を明確にして説得力をもって論

理的に伝えることのできる側面。この二つでまとめられております。後者の側面は一応論理的思考力と言えるのではないのでしょうか。この二つは位相が違うと言うか、前者の側面を円滑に進めるために、人が持つておくべき能力が後者、論理的思考力という構造になっているのではと思います。両方大事ですが、二つ並列という整理ではない形で整理したいなと思いました。

まとめますと、以上三つを見まして、キーコンセプトとして概念的に拾い上げるなら、自己と他者との関係で捉えるーそれを形成力と言っているところもありますー、それから、論理的に伝える面。キーワードとして受容・共感・協同・チームワーク・合意形成・課題解決といったものが浮かび上がってくると思います。

少しこだわっている部分に？を付けています。追加でどうかと思っていることでして、まず、気持ちを他人と分かち合える力。つまり、この人たちと一緒にいると癒やされるとか、この集団で自分が生かされている気がする、この人たちのために自分の力を使いたいとか、役に立ちたいという、これは能力と言うのでしょうか、資質と言うのでしょうか、積極性と言うのでしょうか、そういったことは非常に大事だと思います。

もう一つは、社会共同体の更新です。より良い社会を一緒に創っていきこうではないかと考えようとする資質です。こういうものをもう少し入れたいと思います。人間は社会的動物と言われますが、簡単に文言にしますと、「情動の一体感を形成し、社会共同体を更新する力」と言いましょうか。「情動の一体感」というのは飲みにケーションとか、ランチミーティングとか、そういうものを通して仲間じゃないかと思える力で。人間関係形成力に入るのかもしれませんが、気持ちの一体感を人と作れるということや、社会共同体をより良いものに更新していける力ということも入れたいというのが個人的な思いです。

次に配布資料2の中の資料1, 2を御覧ください。今のような大きな枠組みを設定した後、その中身はどういうものなのかということについて、モデルを二つ用意しました。資料1は、「個体内の聞く話すモデル」です。人の頭の中です。資料2は、人と人とのやり取りの問題。個体間、二人の間の問題として捉えたモデルです。

資料1ですが、これは相手の話を聞いて考えて話し出すまでのプロセスモデルで、これは子供ではなくて熟達者バージョンで考えてみました。インプット段階で相手は何を求めているのか、尋ねられているのは何なのかということや、場を配慮したりする段階。そして、目的意識、このように説明しようというものが生まれ、何を話すかという考えを頭の中で知識を検索します。次に相手意識です。相手が同僚なのか、友達なのか、小さい子なのか、そういった相手意識。そして、状況意識ーどんな媒体で、ただお話しするのか、プレゼンするのかと判断する状況意識。これらの相手意識や状況意識などを配慮して、ではどんな話し方をするのか、どういうふうに知識や技能を思い出しながら選択して話すのかというプロセスをこのモデルは示しています。この資料は教育的な見地で書いてあるので、こういう力を高めるにはどうすればいいかも書いてありますが、見ていただきたいのは分かりやすい説明、話すための技能、話し方をA, B, C, Dと分けて、具体化してみたところ。目に見えるスキルとして具体的にするとしたら、このようなポイントが挙げられるでしょう。状況判断とか論理的思考がBで、Cが相手意識、Dは協同性というか、共感力を高めるためのスキルです。これは指針を作成するときのネタになるかなということで紹介させていただきました。

次に資料2を御覧ください。個体間の大体4人ぐらいの話合いのイメージで作った発達モデルです。発達を描こうとしたものでして、これは真ん中に協同的態度があり、上の左から右に向けて発達していて、下に下りていくという、そういった発達の道筋を考えたモデルです。各々にモジュールを示しており、モジュールは6個。一つは、協同的態度。二つ目は、自己関与。三つ目が、他者受容。四つ目が、自己と他者の関係の進展。低学年は累積的關係、足し算して考えをつなぐ。例えば、「そしてね、それから

ね」と友達の話をつないで話す段階。その次が分離的關係。「自分は自分、あなたはあなた、共通点はここ、違うのはここよ」という配慮ができる段階。そして、最後の段階が論理的關係。自分と他者と、課題や状況というように配慮できる事項がだんだん増えていく段階。そのような自己と他者の關係性の進展も表しています。

モジュールの五つ目がメタ意識です。メタ意識が高くなればなるほど、いろいろ配慮ができるようになるということです。

最後、六つ目がコミュニケーション文化というモジュールを入れました。幼稚園から学校へ、小学校から中学校へ。ここでコミュニケーションギャップ、学校のコミュニケーション文化の違いが出てきます。そういったものも入れたモデルです。根幹として育てたい、真ん中に協同的態度があるというのがエンジンでして、これがコミュニケーション能力を高める上での基盤になるのではないかと考えております。

例を挙げますと、私が入らせていただいたクラスの小学校1年生に「何で話合いせんといかんの？」と聞いたときに、子供たちから「だってその方が楽しいもん。」とか「人の話を聞いたらいいことがある。」という答えが返ってきました。クラスだったのです。これは非常に本質を突いていまして、そういう体験を重ねてコミュニケーションに対する肯定感や積極的態度を培うことが能力を高めるエンジンになるのだと思っております。

モデルを提示しましたが、これは非常に抽象的なのでもう少し具体的にポイントを取り出そうと思えます。

資料3を御覧ください。資料3は、資料2の発達モデルのモジュールごとに、これができていると、こんな言葉が子供から出てくるという形で具体化したものです。一番左にある「協同性」。これはモデルのエンジンです。それから、「自己表出」，「他者受容」，「課題追及・課題のメタ認知」，「状況のメタ認知」となっています。

例えば、自己表出「2」のレベルは、「〇〇さんが～言ったけれども、私は…です。」と言えとか、他者受容の「3」のレベルは「分かりました」とむきにならないで言えとか、課題についてのメタ認知というのは「今考えないといけないのは、…」ということが言えるような状態を示しています。例えば小学2年生でも突拍子もないことを言う子供に対して、ほかの子が「今その話は違うよ。」と言ったりすることがあります。そういったことができるということです。状況認知というのは、論点を整理して、「今までの意見は二つに分かれるね」といった話ができる状態です。これは小学校を中心に作っているのですが、社会人としてはどうなのでしょう。簡単過ぎるのかもしれませんが、コミュニケーション能力の中身を具体的な言葉で表すとしたらこんなことだろうという例として紹介させていただきました。

次に、資料4を御覧ください。先ほど問題になりました論理的な思考力です。これも大事なコミュニケーション能力の中身と考えられますので、中身がどんなものだろうかというのを六つの思考様式で提案したものです。ただ、国語教育界では論理的思考力は何かということに関する理論はたくさんありますから、これが全てというわけではありません。これは大学のテキスト用に大体こんなものではないかと作ったものに過ぎません。これをどう指針に反映させるかは分かりませんが、参考にできるのかなと思います。例えば、多面的思考という思考力。国語教育の世界では、例えば、「サザエさん一家ゲーム」というのをよくやります。タラちゃんは、サザエさんから見ると子供、カツオから見たら^{おい}甥になるのでしょうか、そういったゲームなどをしながら、立場を変えて見ると、視点を変えて見るとこんなふうに見えるという、ちょっとしたゲームをしながら思考力を育てていくものです。

では、次に話を移します。今、大きな理念的枠組みとそれを具体的な言葉で見るとどのようになるかというお話をしてきました。それらの考えを基に、枠組みから導き出さ

れるコミュニケーションの在り方に関する指針作りに向けてどう進んでいけばいいかということをお話しします。5ページを御覧ください。

読みます。「モデルから考えれば、言語コミュニケーション能力は表面にあらわれた言葉遣いだけでは捉えきれない。状況や目的を認知する力や、論理的思考力が背後に必要。しかし、指針は言語使用レベルで表す方がわかりやすい。そこで、社会の各分野を想定し、状況や目的によってシーンを設定してそこで展開する望ましいコミュニケーション行為を示してはどうか。併せて、そこで使われる望ましい言語表現（ふるまい）を例示する。」こんなパターンで考えを進めていけばということを示しています。

そこで、資料5を御覧ください。社会の各分野を想定してシーンを作るときの分け方の提案です。一番左に、文化庁が描く理想的なコミュニケーションの使い手、コミュニケーションの行為をできる人というのを、まず文章にする必要があると思います。それを受けて社会生活、職業生活、市民生活、それから、文化生活に分ける。それぞれの生活面で必要なコミュニケーションの質を示す。例えば、職業生活では、チームとして活動するときに必要なコミュニケーション。市民生活では、もっと癒やしや助け合い、共同体の維持、更新といったコミュニケーションが必要とされるでしょう。文化生活では、創造的な活動や啓発的な活動をするような類いのコミュニケーションが営まれるでしょう。

表の右側には、そのそれぞれのシーンに必要な言葉や態度を入れています。一番どれにも大事なのは協同的態度です。上から行きますと、職業集団組織維持のためのマナーという言葉遣いがあると思います。福岡教育大では事務局のトイレに「ほうれんそう」という、報告・連絡・相談が大事だというポスターが貼ってあります。そのようなマナーです。それから、職業生活で、チームで活動する場合は、論理的に話すことや傾聴の態度が要求されます。双方の主張の調整を図り、調和を保つような言葉遣い、振る舞いも必要です。一方、市民生活は、もう少し他者尊重に立った、いろいろな人がいますから、自治会の寄り合いイメージです。これは子供バージョンの言葉ですが、「僕から話すね」とか「これもあるけれど、それはどう」という話し方が求められると思いました。文化生活は、これは自信がありません。共創的活動をするために必要な言葉というように、枠を作ってみました。

この枠を基に資料6のような「社会分野別コミュニケーションテンプレート」というものを用意しました。例えば、状況というのは、先ほどの資料5で言う職業生活で場面としては企画会議で、目的は依頼、報告や提案などです。相手はこういう人だという相手意識も加えた想定シーンを考えて、そこでの望ましいやり取りを書く。使いたい言葉はこんなのもあるということを示すという、非常に素朴なアイデアなのですが、こんな形でこれを何枚か分野別に出すことなどを考えてみました。

最後です。この提案を基にもっとこうした方が、というのがどんどん生まれると有り難いというのが私の提案の願いです。それこそ共創的、一緒に創るコミュニケーションなので、それがこの場でできればと思っております。

○沖森主査

ありがとうございました。それでは、ただ今の山元委員による御発表について、質問をお受けしたいと思います。いかがでしょうか。

○鈴木委員

全般的にお考えでいらっしゃるかと感じましたが、コミュニケーション能力について自己と他者というのはよく分かるのですが、その中で実際にその自己と他者がコミュニケーションを取る中で、何かアウトプットもあるべきだというお考えでいらっしゃるかと理解してよろしいでしょうか。要するに、相互の言っていることがお互いに

理解できればそれでいいという考え方もあろうと思うのですが、山元委員のお話ですと、何らかのアウトプットがそこにはあるべきだとお伺いしたのですが、そういう理解でよろしいでしょうか。

○山元委員

そうですね。共創的なコミュニケーションを理想としていて、共に創ることを理想としていますので、他人はこう思っているのだけれども、自分はこうだと言える力も重要な要素だと思います。

○鈴木委員

内容的には同じことが、結果として必ずしも出来上がるのではなく、対立した考え方ですよということを理解してもらえれば、それでもいいということですか。

○山元委員

そうですね。共感的に理解しながら、その違いを乗り越えるというか、第三のものを作り上げていくという能力です。黙っていてもいいと思うのです。「うーん。」と言ったり、「賛成。」でもいいと思うのです。

○入部委員

山元委員のお話を拝聴して、いろいろ考えさせられました。他者意識というのは非常に難しいと思うのですが、例えば、父親や母親でも他者という考えもありますし、全く初めて会う方にも、一応他者という意識があると思います。資料2は、低学年からの発達のプロセスに合わせておまとめいただいているかと思います。他者の意識の発達と言いますか、例えば、非常に近しい関係の他者はプライベートで語るという他者だと思ってしまうのですが、それが徐々にフォーマル、よりパブリックに近くなっていく。インフォーマルからフォーマルへというように、他者も少しずつ発展的に、広がりを持っていくと思うのです。そういう中で、山元委員の資料2の他者、自己と分離的關係を持つところについて、何か補足していただけることがございましたら、お願いします。

○山元委員

基本的に義務教育段階での子供たちを念頭に作っているものですから、他者は同質の同年齢の、というイメージのモデルです。入部委員には、非常に欠けているところを指摘していただいております。社会に出れば、この他者はいかなる者なのかという配慮は必要です。それをするには自分の側にいろいろな経験がなければならぬので、他者を受容するという基本的な構えと同時に、他者を推測する状況もそうだし、目的もそうだし、他者についても推測する力、配慮がモデルには要るかと思われました。

○関根委員

資料6のテンプレートですが、こういうものができたら、とても使いやすいものができると思うのですが、ざっとどれくらいの量になるとお考えですか。つまり、今、社会生活が多様化していて、仕事も様々だし、人間関係も従来の上司一部下だけではなく、例えば、正規社員と非正規社員がいたり、年上の部下がいたり、かなり複雑になってきている。そういう中でどのくらい作れるものか、あるいは作ったらいいものなのでしょうか。

○山元委員

そうですね、この資料5の職業生活のまた下位分類でいろいろなところを作り、そして、相手というところでまた下位分類してというように、枝分かれが相当なされるのではないかと思います。その辺りはまとめる方をお願いを、というような丸投げ状態ですが、市民生活は多文化という時代ですので、相手が日本人かどうか、といった分け方も一つあるのではないかと思います。まだまだ漠然としており、申し訳ありません。

○沖森主査

では、私から1点だけ教えていただきたいのですが、資料1で真ん中辺りに「説明力を高めるためには」とあります。その2のところは線が引かれていて、モジュールとして「相手・目的・状況・情報」を挙げられています。この「相手」、「目的」、「情報」というのは、先ほどのテンプレートには三つ要素が入っているのですけれども、この場合の「情報」というのはどういう意味でお使いなのでしょう。

○山元委員

その人が持っている知識のことを言っております。つまり、話題になっているものに関しての情報がたくさんあれば、当然豊かな説明になるので、話合いや説明する力を子供たちに付けるためには、ネタについての情報をいっぱい入れないと話せないということで、ここに「情報」と入れました。ですから、テンプレートの場合、この情報の中身はたくさんあるので書き切れなかなということなのです。

○沖森主査

たくさんあり過ぎてということですね。分かりました。ありがとうございました。

○やすみ委員

感想と質問をさせていただきたいのですが、いろいろなお話、ありがとうございました。

まずは、資料5を拝見して、文化生活という枠の中に書かれているところがありましたけれども、それはちょうど私が日頃関わっている短詩系文芸などがお役に立っているところなのだろうと思って拝見していました。こういうコミュニケーションの中にきちんと入っているということを感じることができてうれしかったです。

そして、質問ですが、山元委員は日頃たくさん子供さんたちのコミュニケーションの様子を見ていて、子供の方が優れているなと思うコミュニケーションの様子はありますか。大人になると何でこれがなくなってしまうのだろう、と気付かれたところなどがあれば教えていただきたいです。

○山元委員

ありがとうございます。まず、最初におっしゃった文化生活を入れるというのは、最初にしつこく言いました情動の共有です。一緒にいると豊かな感じがするとか、楽しいとか、そういった資質を育てるにはこの文化生活のコミュニケーションは大事だと思って入れさせていただきました。

子供の方が優れているのは、子供は本当に共感力を持っているのだなとしみじみ感じたことがあります。1年生の4月ですが、先生が強いた言い方をしたために女の子が泣いてしまったことがありました。そのときにほかの子供たちが「大丈夫よ。」とか、「誰か、〇〇ちゃんに代わって言ってくれる人はいませんか。」とか、自然にわいわい言い出して、結局その子は言えたのです。

先生はそのときに自分が強要して言ったために悪い状況ができたのだけれども、それを救ったのは子供たち同士の共感力といった、何とかこの場をせねばという思いが救ったのだと、その先生はリフレクションでおっしゃっていました。そういった本来持っている共感力が、年を取るとどうなのでしょう。そのままある方もいらっしゃるのですけれども、子供の純なところで見えるエピソードでした。

○沖森主査

山元委員，ありがとうございます。では，次の発表に移らせていただきます。

配布資料3に基づき，関根委員から新聞における言葉を題材として書き言葉のコミュニケーションの在り方を中心にお考えを御発表いただきます。お忙しい中，御準備くださいますありがとうございます。では，よろしくお祈りします。

○関根委員

よろしくお祈りします。関根です。

前回，福田委員の御発表のときに，使用頻度の高い語彙や表現を調査して，それに合わせた語彙や表現について言い換え可能な例を挙げるという御提案もありました。私は長年，新聞の用語の仕事をやってきましたので，本日は情報を正確に分かりやすく伝えるという，言わば書き言葉のコミュニケーションといった観点で，新聞が実践してきている語彙や表現の言い換えを中心にお話ししたいと思います。

スライド2枚目を御覧ください。新聞はなぜその言葉を言い換えるのか。一つは，難しいから。常用漢字表にない漢字を用いた言葉，専門用語，特定の分野で使われている，一般にはなじみのない言葉などです。次に，戸惑うから，と分類してみました。，難しいわけではないけれども，意味が同じ，意味がほとんど同じなのに様々な表現があると，読者は戸惑いを覚えるのではないか。言い換えというよりは，表記統一と言った方がいいかもしれません。3番目に，傷つけるから。これは不快感とか，屈辱感を与える表現で，傷つけるまでに至らなくても，少し気になるとか，何となく不愉快とか。以前，塩田委員が，「感じの良くない」という言い方をしていってしまったと思いますが，そんな表現と言ってもいいかもしれません。

スライド3枚目を御覧ください。まず，難しい言葉の言い換えについてです。日本新聞協会に「新聞用語懇談会」という組織があります。新聞・通信・放送の用語担当者，アナウンサー，校閲や考査といった仕事をしている人たちが情報交換しています。この用語懇談会が出てきたのは，昭和28年のことです。その目的は当用漢字対策でした。使う漢字の数を決めて，その枠内で平易に文章を書くという当用漢字の趣旨は，書き言葉のコミュニケーションをスムーズにするという点で有効と思われ，新聞は真っ先にそれを採用したのですが，当時の用語担当者の言を借りれば，それは「茨の道」だった。なぜ「茨の道」などという表現をしたのかと言うと，当用漢字というのは，使用する漢字を決めただけで，そこにはない漢字を含む熟語をどうするかというのは全く示してくれなかったからなのです。その後，「同音の漢字による書きかえ」などはできたのですが，最初は何も手掛かりがなかった。それで新聞社は独自に言い換えをいろいろ考えたのですが，その言い換えの難しさを「茨の道」と表したわけです。そうした当用漢字対策のための意見交換の場として，生まれたのが用語懇談会で，最初の仕事として「新聞用語言い換え集」というのを1955年に作りました。このように大体1,300語ぐらいの言い換えを示してあります。これは古くて見にくいので，分類して幾つか抜粋してみました。

スライド4枚目を御覧ください。言い換えが定着して，もう元の言葉自体意識にすら上らなくなったものもあります。「^{がいせつ}剗切」とか「^{ぎやくと}逆賭」とか，こんな言葉が昔は新聞

で使われていたのです。「逐鹿戦」というのは選挙戦での決まり文句だったようです。こういうものを使わなくなっただけでも日本語の文章は随分分かりやすくなったと言えるでしょう。戦後の国語改革についてはいろいろ批判もありますが、こういう言い換えが定着しただけでもやった価値があったのではないかと思います。

ただし、使いにくかったり、違和感があったりして定着しなかった言い換えもあります。例えば、Bのようなものは、2010年の常用漢字の改定で本来の漢字が常用漢字に追加されたものです。この用語集は随時見直されていて、今まで15回ほど改訂されていますが、言い換えが定着したAのような言い換えは載っていません。Cは今の用語集にも載っている、残っている言い換えです。こういう言い方は世間では、つまり、新聞や放送が取材する先の人たち、相手方の人たちは使っているという現実があるということも示しています。

スライド5枚目を御覧ください。「逐鹿戦」というのが使われている紙面です。ちなみに、この横の見出しの「ヒ總統」というのはヒトラーです。下には「獅子吼」と書いてあります。「獅子吼」というのも今は使わなくなった言い方ですよね。戦前の新聞というのは、このように漢字が多くてすごく黒っぽい。大正時代にも漢字制限をやっていて、読売新聞では約6,000字を3分の1に減らしています。ところが、昭和21年に当用漢字に先駆けて漢字制限を実施したときは、2,300字を追放するという社告が出ています。大正時代に2,000字に減らしたのに2,300字追放するというのは、計算が合わないですね。つまり、戦争が終わった時点で使用漢字が約4,600字あったということなのです。戦争が2,600字増やしていた。国民を鼓舞するには、荘重なイメージを与える漢語が役に立つし、漢語を使うことでよく分からないけれども、威厳のある勇ましい印象を与えることができる。それから、戦況が悪化して、国民に本当のことをストレートに伝えられなくなると、この漢語の分かりにくさが重宝された。その結果、新聞が真っ黒になってしまいました。戦後の国語施策の実が挙がって、漢字がだんだん少なくなって行って、この調子だと漢字はなくなるのではないかと予測をした人もいましたけれども、そんなことにはなりません。ワープロ、パソコンの普及で、難しい漢字が打てるようになって、常用漢字も改定で数が増えた。一般に使われる漢字の数は増えてきています。書けなくても読める漢字ならまだしも、よく分からないけれども、打ったら変換できてしまったというものも少なくないと思います。日本人は漢字を有り難がり、過度に思い入れをする傾向があって、難しい漢字を使う方が何か立派だといった意識がどうも根強いのではないか。そういう意識自体を書き言葉における分かりやすいコミュニケーションという観点から反省してみてもいいかもしれません。

次に、難しい言葉を言い換えるだけではなくて、難しくない言葉も言い換えるということについてです。ここにおいでの方は新聞に寄稿されたり、あるいは談話を寄せられたりした方も多いのではないかと思います。その際に、「情況」と書いたのに「状況」に直されたとか、「独得」と書いたのに「独特」と直されたとか、表記を換えられたという経験をお持ちの方もいらっしゃるのではないかと思います。別に難しい言葉ではないし、みんな常用漢字です。それなのに何でそんなことをするのかと腹を立てられた方もいらっしゃるかもしれません。

スライド6枚目を御覧ください。これは武部良明先生の「異語的同語について」という論文を参考に、新聞用語集での扱いを例示してみたのですが、元々異なる語なのだろうけれども、辞書などでは同じ見出し語で併記しているものもある。あるいは、別見出しに意味を載せているけれども、意味の差が非常に少ないものがAです。さらに、Bのように歴史的仮名遣いが本来違っていて、より語源的に違うのだろうと思われるも

のこともあります。Cは、一般的には同じように扱えそうだけれども、固有名詞などでは使い分けているもの。これは例外とする必要があるわけです。

新聞用語集では、一般にもおおよそそちらを使う方が多いものとしているもの、それが白い三角です。黒い三角の方は、一般にはどちらも同じくらい使われているので、どちらか一方に決めたというものを区別して記載しています。

新聞は何でこんなふうに表記を統一するのか、もっと多様な表記を認めてもいいのではないかという批判を受けることがあります。難しい語で言い換えるのは分かるとして、同じ意味で表記が異なるだけなのだから、別にいいのではないかという意見もあると思います。むしろ多様な表記がある方が言葉としては豊かで、文化とはそういうものだといった意見もあると思います。もちろん、文芸作品ではそうでしょうけれども、情報を伝達するということが目的の新聞記事では、同じ意味を表しているようなのに異なる表記が現れると、戸惑いというか、引っ掛かりが生まれて、読解する思考の流れが止まってしまうということもあるのではないかと。福田委員が前回、ワーキングメモリーの容量というお話をされていて、そういうちょっとした戸惑いがあると、それを処理する、つまり、これはあれと表記が違うのだけれども、同じ意味なのだろうかとか、あるいは、別の言い方になっているのは何か意図があるのだろうかということに、メモリーの容量を取られて、せっかくそこまで保持してきた情報を忘れてしまったり、それから先の情報を処理するのが面倒臭くなってしまったり、そういうことがあるのではないかということです。それは、言葉そのものが難しいため理解できないというのとは、また違った、読解における「壁」でしょう。

例えば、外来語、片仮名語について、これはしばしば余り使ってくれるなという意見が高齢者から寄せられます。難しいから分かりにくいというのはもっともな理由ですが、中にはそれほど難しくもないのに、使うなと言ってることがあります。片仮名で書かれているだけで一種の拒絶反応というか、つまり、理解するために一瞬、読解する思考の流れが止まる。どうもそういうことがあるらしいのです。難しい片仮名語は最初に注釈を付けたりするのですが、だからといって次に出てきたときにそのまま使うと、一瞬立ち止まってしまう。

そこで新聞では、例えば、2回目に出てくるときには、その片仮名語を避けて指示代名詞で置き換えるという工夫をすることがあります。指示代名詞を多用しないというのは文章の基本ですが、それにも増して片仮名語を目立たせない方が分かりやすいと感じてもらえることがあるようです。そのように表記統一というのは、読解する上での障壁、壁をなるべく少なくする、道をなだらかにするという意味合いがあると思います。

2段目の「気運・機運」というのは、それぞれ項目を立てて、別語として掲載している辞書が多いようです。例えば明鏡国語辞典では、「物事がある状態になろうとする傾向」が空気の「気」の方。機会の「機」の方は、「あることを行うのに適した、時のめぐりあわせ」というように語釈を付けています。しかし、例えば、「コミュニケーションについての指針を作成する「キウン」が高まった」というときに、どちらが適切でしょうか。傾向と巡り合わせでは、傾向の方が客観的で、巡り合わせは運命的なニュアンスがあるということも言えるかもしれないけれども、それにこだわって一つの記事の中で仮に使い分けたとしても、恐らくその意図は読者には伝わらない。何で違うのだろうかとか、そっちに頭が行ってしまって肝心の内容が頭に入ってこないということもあるのではないかと。そういう意味で、表記統一することで余分なところでワーキングメモリーを消費させないという効果があるのではないかと考えています。

三つ目が、人を傷つけないための言い換えです。まず、単純な言い換えではないということを強調しておきます。差別表現の言い換えというのは、差別をなくすことには直接つながらないし、時として差別の実態を覆い隠す場合もあるわけで、あるいは、歴

史的な記述においては使わざるを得ないこともあります。こういう考え方を前提としてコミュニケーションという観点から、何気なく使った言葉が、感じの悪さ、不愉快さ、不快感、屈辱感といったものを与える可能性がある場合について、新聞や放送が気を付けているものがこんな例です。

スライド7枚目を御覧ください。ここにどんな問題があるか。つまり、新聞・放送の場合は、その言葉が向けられた当事者、記事の中でそういう言葉で表現された人だけではなく、読者に対しても不快感を抱かせないかどうか、気を付けています。一般のコミュニケーションの場合も、直接の対話相手だけではなく、それを聞いている第三者、あるいはそれを聞き及ぶ可能性のある関係者についても気を配る必要があるのではないかと思います。

「台風の当たり年」というのは、比喩の使い方としては間違っていないですが、台風の被害に遭った、あるいは遭う可能性のある人にとってはどう受け止められるか。想像力を働かせて自分以外の人間の心情に寄り添って表現を選べるかどうか。もしかしたら、今までの御発表の中で何度か言及された「他者意識」ということと関係してくるのかもしれない。ほかの語についても、こんな問題があるわけです。これらはかなり新聞や放送で気を付けているものです。

私が気になっているのに「女房役」という言葉があります。「〇〇投手の女房役の●●捕手」とか、「内閣官房長官は首相の女房役」というように使われることがあります。これは女性の役目が補助的なものであるという固定観念を利用した例えです。例えというのは、多くの人を持っている固定観念が強ければ強いほど分かりやすいかもしれませんが、その固定観念を疑う者にとっては不愉快この上ないわけです。女房役の例えが広く使われることで、性差による役割分担という意識が固定されてしまうのではないかと。それに官房長官が首相の女房役というのは、別の意味でも、少し不正確な表現ではあります。決して補助的な役目をしているばかりではないからです。この話を機会があると時々するのですが、20年くらい前まではこの話を聞くと、聞いている女性の方から激しくうなずいていただいたのですが、最近うなずきが少なくなりました。特に若い人たちの間で。この辺りは意識の変化なのか…。

例えが分かりやすければ分かりやすいほど、差別的なことにつながりかねないというのは、あからさまな差別表現を使った例えや慣用句を浮かべていただければ、それがとても分かりやすいことが分かると思います。だから、分かりやすさというのは、円滑なコミュニケーションのための第一の条件ですが、それが不愉快さにつながりかねないというのは心しておくべきことなのではないかと思います。

こんな言い方もあります。スライド9枚目を御覧ください。火事の記事でこんなのがあったらどうでしょうか。「よく焼けている」というのは、以前はニュースで時々出てきたかもしれませんが、今は見聞きしないと思います。「見事に焼けた」というのも、被災者という存在を念頭に置かないで、ただ現象だけ描写しようとするとな非常に分かりやすいかもしれませんが、「火災現場の近くに住む人が、「いや、昨日じゃなくてよかった」とホッとした」というのは、正直な感想ではあるでしょうが、被災者の心情に思いをいたしたとき、そんなことが言えるかどうか。

これは、東日本大震災の記事に関して福島県の地元紙から聞いたことです。被災した学校が、ほかの学校の一部を借りて授業するとき、しばしば「間借りする」と言っていた。しかし、「間借り」というのは他人の家に厄介になることです。〇〇小学校に間借りして勉強するという記事を目にすると、心理的に負い目を感じる児童もいる。そういう話が学校関係者からあって、例えば、「一緒に勉強する」というように工夫することにした、ということを知ったことがあります。当事者の気持ちに寄り添うというのは、そうたやすいことではありません。

スライド11枚目を御覧ください。「私ごとき、たかが新聞記者風情が訳知り顔にこ

んなことを申すのもはばかられるのですが、」これは大人のレトリックですが、これを間接話法に置き換えて、「関根ごとき、たかが新聞記者風情が訳知り顔に言った」と言うと、私も傷つくし、恐らく新聞社の同僚も愉快ではないだろうと思います。

同じような言い回しをここに挙げてあります。敬語の誤用の典型に、尊敬語と謙譲語の取り違いがあって、その理由の一つには、謙譲、謙遜、へりくだるという感覚自体が希薄になっているというか、そもそも分からなくなっているのではないかと思うことがあります。ここに挙げたのは別に文法的な謙譲語というわけではありませんが、意味的に謙譲の気持ちが含まれる言い方です。これを中立的な言葉として使ってしまうのはまずいでしょう。

これ以外でも、例えば、「愚直に稽古を積んだ」というのはどうか。「愚直」というのは馬鹿正直の意味ですから、マイナスの意味合いが強い。もし本人がへりくだってそう言うのはいいかもしれないけれども、客観的な描写として使ったらどうだろうか。使うなら例えば、「愚直なまでに」とすべきでしょう。特に若い世代ではそういう細かいニュアンスの違いが気付きにくくなっているのではないか。そういうところまで分かってこそその語彙力ではないかと感じることがあります。

「させていただく」について塩田委員がいろいろお話しになりましたが、そもそも「させていただく」というのが表すべき謙譲という概念自体が分からないのではないかという側面もあるのではないかと思います。

新聞の文章というのは、分かりやすさと正確さ、それに今まで申してきた気遣いとか心遣いという三つのベクトルが大事だと考えていますけれども、これは一般のコミュニケーションにも通じることのような気がします。ただ、その心遣いがある種の価値観の押し付けにならないようにする、それを提示するのは難しい。特に敬語絡みになると、どうしても上下関係の話が出てきてしまうので、「現代社会における敬意表現」で示したような線で持っていけないかなと思います。

福田委員のお話で、受信者にとって分かりやすいコミュニケーションにするには、受信者に関する知識、年齢や社会的地位を意識することが大事だという御指摘がありました。新聞の受信者、つまり、読者は年齢、社会的地位、処理能力などが様々で、どれに絞るかと言ったら難しい。分からないです。そもそも日本人全体の国語力の実態

がよく分からない。新聞は昔から中学生でも読めるというのを標榜^{ほう}していて、それが常用漢字の範囲内で書くという方針になっているわけです。正確に言うと、常用漢字と新聞で使っている漢字の範囲は少し違うのですが、それを説明すると長くなりますので、ここではおおよそ常用漢字と理解していただくことにします。

では、その常用漢字を使って書けば分かってもらえるのかというと、そんなに簡単ではない。スライド12枚目を御覧ください。ある時期に、新聞社に過去に寄せられた読者からの問合せや質問から、言葉に関するものをピックアップしてみたものの一部です。記事ではきちんと注釈を付けていても、それに気付かないで聞いてくることもあるし、記事とは全然関係なくて、新聞社を辞書代わりにして聞いてくることもあるので、ここに挙げてある語が全て記事で使われていたということではありません。少し前の資料なので、若干、その当時のニュース、世相を反映した言葉が入っています。

これを見ていただくと、新聞の読者というよりは、一般の日本人が実は分かっていない言葉は結構あるのではないかということに気付かされます。読みに関しては、これは全部常用漢字です。動詞は終止形なら分かるけれども、活用が変わると読めないということもあるのかもしれない。先週、私が講義を持っている大学1年生に読ませてみたら、全部できた者はいませんでした。頻度が少なかったり、特定の分野だったりすると、結構難しい。だから、もし書き言葉のコミュニケーションということでは、誰にでも分かる広場のコミュニケーションのためには、漢字の範囲だけでな

く、語彙というか熟語というか、そういう範囲を提示することが必要になってくるかもしれません。

スライド 13 ページ、これは片仮名語、外来語です。ここで目に付くのは専門用語です。難解な言葉というのは、一般語はまだ言い換えが効きますけれども、専門用語は簡単には言い換えられません。例えば、医学用語なども難解だからといって新聞が勝手に言い換えて分かりやすく説明しましたと言っても、それでは病院へ行って専門用語を使って説明されると患者は理解できない。だから、専門用語の後に言い換え語を添えたり、別に詳しく説明したりといった工夫をしています。新聞は、専門家と非専門家の間の架け橋であるべきだと思っています。

国語分科会でコミュニケーションを扱うとしたら、専門家と非専門家との間のコミュニケーションが一つ大きな課題になってくるのではないかと思います。専門家というのは、別に学問分野の専門家ということだけではなく、行政とか経済、金融とか、一般になじみの薄い専門性の高い、しかし、国民にとっては生活に密接に関わるような分野において情報を発信する人です。専門家と非専門家は場面によって入れ替わります。ここにいらっしゃる日本語学の専門家でも経済の専門家ではありません。それぞれの分野がかなり高度に発展し、専門化している現状だと、誰もが専門家の発信する情報が理解できない、言わば情報弱者になり得るのではないかと。特に行政が発信する情報が分かりにくいというケースがあります。スライド 14 ページに示したように、最近では、台風の出された「避難準備情報」の意味が分からないために逃げ遅れたということがありました。スライド 15 ページですが、災害の際には、「避難準備情報」と「避難勧告」、「避難指示」が出されます。どれが一番緊急度があるかということも分かりにくいですね。実際、スライド 16 ページのようなアンケートをしていて、分かっていないという人が多いという結果も出ています。これに関しては、首相が国会答弁でも触れていて、内閣府で名称変更も含めたガイドラインなども検討中のようですが、こういう命名などに関しても、例えば、国語分科会が何らかの形で関われないかという気もします。

自分が専門的に関わっている分野の言葉については、それを使って専門家同士では正確にスムーズに伝えることができるから、一般の人、つまり、非専門家がどのくらいそのことを分かっていないのか、については、思いが及ばないということがあると思います。それに思い至るのも「他者意識」ということになってくるのかなという気もします。行政や役所が発信する、一般国民が知るべき情報の伝え方に関しては、国語分科会が扱うべき課題としたいという気持ちがしています。

これまでの御発表は、比較的 1 対 1 の対面的なコミュニケーション、相手の顔が見えていて、どういうことをするかという目的があって、その目的を実現するにはどのようにすればいいかという観点でのものが多かったような気がします。

そこで今日は、不特定多数に向けての、特に書き言葉を使用する場面でのコミュニケーションという観点からお話をしたいと考えた次第です。スライド 17 枚目ですが、まとまりのない話をあえてまとめるとすれば、一つは、1 対 1 ではなくて 1 対多、多対多、不特定多数が形作っている広場のコミュニケーションというか、発信する側も受け取る側も興味や関心やリテラシー能力なども様々で、そのコミュニケーションが十全に行われたかどうかすぐには分からないという場面で、何が大切か。「正確である」というのはもちろん言うまでもないですが、そこに「分かりやすさ」と「気遣い」を意識することが大事だろうということ。ただし、さっき申し上げた例のように、分かりやすさが不愉快さをもたらすこともあったり、正確さが分かりやすさを阻害することもあつたりします。また、正確さが不愉快につながることもあります。

以前、国立国語研究所で医療用語の言い換えのプロジェクトに参加していたときに

気付かされたことですが、例えば、「腫瘍」というのは、良性腫瘍も悪性腫瘍もある。がんのことを指して使うこともある。悪性の腫瘍で「がんです」と言えば、これは正確です。ところが、そう言われるとショックが大きい人もいます。告知する場合は、患者によっては腫瘍と言っておいて曖昧さを残しつつ、話を進める方がいい場合もある。つまり、正確さがいつもいいというわけではないわけです。だから、分かりやすくあることと、正確であること、気遣いがあることというのは、支え合うというよりは、それぞれの限界を知って、我慢し合う、抑制し合うという関係なのかもしれません。

もう一つは、繰り返し強調しておきたいのですが、専門化が進んだ現代社会で必要な情報をやり取りするには、専門家対非専門家のコミュニケーションをどうするか。特に行政と市民の間のコミュニケーションという観点が入れられたらと思います。前々からの課題になっている「公用文作成の要領」の見直しを、問題意識としては引き継ぐ形でできないかなと、そのように改めて思っている次第です。以上です。

○沖森主査

ありがとうございました。それでは、ただ今の関根委員による御発表について、質問をお受けしたいと思います。お願いします。

○田中委員

ありがとうございました。お話を伺っていて、特に最後の関根委員の御提案としては、分かりにくい専門用語調査みたいなものをお考えになって、新聞の面的な感じで、それぞれのところでどういうものが分からないとされているのかといったことに対して、何らかの工夫をするということが我々の結構大事なミッションの一つになるのではないかと御提案だと理解しました。

その中で、私、今、新聞の面的な発想で、と申し上げたのはどういうことかと言うと、例えば、学術的な細分化されたジャンルに入っていくと、それぞれかなり細かいところに入ってしまうので、ざっくりと新聞の面的なところぐらいで今回御提案されたようなことをやっていくというのは、すごく現実的だと思いました。もう一つは方向性が明確になる。つまり、人間関係をどうするのかといった問題もすごく大きな問題ではあるけれども、これはいろいろなケースがある。リテラシーの違いもあるだろう、年齢の違いもあるだろう、立場の違いもあるだろう。一つ前の御発表に対して、関根委員がおっしゃっていた、テンプレートは一体幾つ作ればいいのかといった問題が、かなり難しい問題としてある。もちろん、そちらは大事だけれども、正確な情報をお互い傷つけ合うこともなく共有し、きちんと次の行動に移していくことからすると、すごく分かりいいなと思ったのですが、どういうところ辺りまでの専門用語をお互いに共有するイメージをお持ちなのかということをお伺いしたいと思います。

○関根委員

国立国語研究所で外来語に限ってですが、調査で、「どういう分野の言葉を言い換えてほしいか」と聞いています。2番目に多かったのが、「医療・福祉」でした。それで病院の言葉の言い換え提案をやったのですが、最も多かったのが、「政治・経済」でした。税や、年金、社会保障などに関する用語や説明の仕方について、分かりにくさを感じる人は多いはずです。

そういうものは特に私たちの言わば、大げさに言えば命と密接につながるようなものなので、さっき言った「避難準備情報」などもそうですが、その辺りを私はイメージしております。

○田中委員

ありがとうございます。ただ、今、例に挙げられた国立国語研究所の外来語の言い換えのものというのは、事前に「国語に関する世論調査」も含めて、相当長い期間を掛けて大量の語に対しての認知度・使用度調査を経てということだったと思うのです。そう考えてみると、比較的短いスパンの中で似たようなことをやるのは難しかろうと何となく思うのですが、どんな辺りをベースにお考えですか。

○関根委員

あのときもそれほど長くやったわけではないのですが、思っていたのは、前、石黒委員が、質的調査が大事だということをおっしゃっていましたが、大規模な量的調査もそうですが、この言葉の、特にコミュニケーションの問題とか、言葉の分かりにくさということに関しては、余り量的な調査よりも、むしろ狙いを定めた質的な、少人数であってもそういう調査の方が有効なのではないのかという気がしています。何かそういうことができないかと思っているのですが、経済とか、行政用語だけではなく、ほかの言葉に対しても、例えば、さっきのテンプレートにお書きになっていたようなことに関しても、我々の頭の中で考えるのではなく、実際に現場に行って本当にどんなことが分からないのかという組織的調査をやった方が、汎用性とか応用性が効くような気がします。私はそこまでまだ思い至っていません。

○田中委員

そうすると、医療用語のプロジェクトのときは、結構ヒアリングを行いました。そんなイメージですか。

○関根委員

そうです。あのときは病院に行って、患者と医師と両方やりましたから、今回も発信する側と受信する側と、両方やる必要があるでしょう。受信する側は、何が分からなかったのか分からないということがあります。今回のように、例えば、「避難準備情報」みたいなものが出てくると、分からなかったのが、明確になります。この三つの用語がどのくらい分からないか。多分、言葉だけを新聞などで読んだとしても、分かったつもりになっていると思うのです。

だから、その調査はすごく難しいと思います。ただ、それがやれば、本当に何がコミュニケーションにおいて問題になっているのかということが本当に出てくるような気がします。コミュニケーションを発信する側がいろいろあれこれ考えるよりも、受信する側です。本当に何が必要なのかというのは、何かいい方法がないのかと思います。

○入部委員

大変面白く拝聴しました。ありがとうございました。

分かりやすさほど分かりにくいものはないと思います。例えば、単語レベルの分かりやすさということで、たくさん例を出していただきましたが、文レベル、文章レベルならどうなのか、パラグラフ単位ならどうなのか、その分かりやすさというのにレベルがあると思います。先ほどの「避難準備情報」に関して、私は一番上のものはとても分かりにくいと思います。一つ一つの単語は分かりますが、一文が、例えば60文字以上になると、途端に分かりにくくなります。

例えば、ワーキングメモリーの方が一杯になってきて、記憶されておらず、次に読んだもののつながりがうまく行かないこともあると思います。分かりやすさのプロとして、関根委員が、文レベルで、文章レベルで、パラグラフレベルで、気を付けていらっしゃるがあれば教えていただきたい。

○関根委員

文章だと、例を挙げると長くなってしまってここになじまなかったの、単語レベルでお話をしましたが、例えば、文の長さであるとか、あるいは主語と述語が整っていない文章、あるいは、特にあるのが修飾語の係り方。文章が長くなってくると修飾語がどこに係ってくるのか分からない。そこで誤解が生じてしまうこともある。あるいは、読点の位置一つでも、意味が逆になってしまうこともある。そういうものもたくさんあります。だから、そういうものも確かに何か整理をして提示できたらいいと思います。

○川瀬委員

さすが関根委員だと思って聞いていました。とても目からうろこでした。どうしたらいいのだろうとすごく悩んでいましたが、関根委員がおっしゃった話は単純な言い換えの話だけではありません。発信者としては、分かりやすく、優しさをもって正確に伝えるということを心掛けていきましょうということだと思います。

今、二つ目の質問の中でお答えになっていた、受信者に対しても、受信者への呼び掛けという考え方もすごく大事だと思います。要するに、分からないと放棄してしまうのではなく、分かろうとしよう、大らかに受け止めようよ、理解し合おうよといったこと、双方の努力というか、気遣いというか、それが打ち出されれば、話し言葉でも書き言葉でも、会社であっても学校であっても、何だか全部に共通する概論がきちんと組み立てられそうに思うのですが、私の理解で合っていますでしょうか。

○関根委員

確かにそのとおりです。どうしても分かりやすさを追求すると、とにかく分かりやすく、分かりやすくで、さっき言ったように分かりやすさと正確さが反比例しますから、正確さが失われていってしまうわけです。そうすると、お互いにとっていいコミュニケーションではない。つまり、受信者側でも分かろうとする努力をしてもらわないといけないのです。それによって分かりやすさと正確さの両方を高めることができるのであって、ただ分かりやすくだと、これは日本語として貧しく、薄くなってしまいます。だから、双方の努力が必要です。

○川瀬委員

それこそ原稿を書くにしても、言葉を選ぶにしても、何かを伝えるにしても、「川瀬さん、そんな表現は今どき誰もしませんよ。分かりませんよ。」と言われても、「分からない人が悪い。」と言ってつい主張してしまうことがあります。分かる人には分かるだけでなく、分からない言葉があったら分かろうとする人を育てるというのも一つの努力ではないかとよく思います。

文化庁での国語というものを考える意識とすると、分かりやすさ、相手を傷つけないということだけに流れていくというのは良くないだろうと思います。

○関根委員

仮に例えば、語彙みたいなものを選定するとして、発信者側はこのレベルの語彙で発信するように、受信者側は少なくとも最低このレベルの語彙は知っておく必要がありますよと、両面が必要です。

○川瀬委員

私どもにも、言葉が難し過ぎて分からないというお叱りの電話やら問合せやらをた

くさん頂戴します。最近多いのは、「アンダーパス」です。「アンダーパス、アンダーパスとニュースで言うけれど、何のことだか分からない。きちんと日本語で説明してほしい。」というお叱りを頂きます。私どもテレビですので、映像を伴っているのだから分かっていないかと思っていたのですが、そこまでかみ砕かなければいけないのか、分かるうともしてないのではないかと思うところもありました。受信者側啓発というのは、コミュニケーションを語る上ですごく大事だという気がしています。

○沖森主査

では、お二人の御発表を踏まえて、具体的な問題についてそれぞれ自由に御意見、御感想を頂きたいと思います。

○石黒委員

お二人の御発表を伺っていて共通して感じたことです。コミュニケーション能力と言いますが、一つは「能力」というよりも「技術」の方が言葉としてはいいのかなということです。つまり、「能力」というのはもちろん、伸ばすことができるわけですが、「技術」とすると、学校で言えば教育、社会で言えば研修といった、そのスキルをより高めていくことが明確になって、誰でもある手順を踏めば伸ばせるものだという意識ができるのかなという気がしました。

お二人のお話で、例えば、新聞であれば実例の重みというか、「台風の当たり年」とか「積み残された乗客」はたまったものではないと思います。実例の力はすごいと思います。一方で山元委員の「糸の絡まり」、最初に映していただいたものですとか、あるいは、サザエさん一家ゲームなど、そのように視点を変える、立場を変えるとか、具体例がそこにポッと一つ入るだけで随分違うし、それによってこれならばコミュニケーション技術を高める、教育に結び付けられるようなことがあると思いました。

先ほど関根委員が御質問に対する中でおっしゃっていたように、社会が複雑になってきているという現状があるからこそ、その複雑な社会の絡まりをほぐすような一つの軸としてのモデルがあったらいいなど、一方ではそう思います。ただ、どうしてもモデルは抽象的になりがちなので、文化庁の持ち味は今回の調査もそうだと思いますが、具体的な例だと思うので、それをどのくらい反映させられるのかということが、教育とか研修といった絡みで気になりました。

○森山副主査

先ほどの関根委員のお話で、分かりやすさ、正確さ、そして、気遣い、心遣いなど、本当に広場のコミュニケーションというのが大切だなと伺っていました。気遣い、心遣いの範囲で、例えば、一時期教育現場で子供の「供」というのが使われていない時期がありました。あるいは、障害者の「害」を平仮名で書くとか、いろいろな捉え方がある場合に、どんな程度の方々が、あるいはどういう立場の方々がおっしゃるかということによって、結構その判断が難しい場合があるかと思えます。その辺りは、マスコミュニケーションの場ではどう対応されてきたのでしょうか。

○関根委員

「障害者」や「子供」など、私としてもお話ししたいことはたくさんあるのですが、それは置いておいて、少し論点をずらすようで恐縮ですが、先ほど言ったように、日本人はどうしても漢字、表記にこだわるというか、一点一画を大事にして、細かいところにこだわってしまいます。そうした表記の部分にこだわってしまうところがあって、もう少し大らかにできないものなのかなと。表記のこだわりは正にコミュニケーションの障害につながると思うのです。

つまり、子供の「供」について、どちらの意見もおっしゃることは分かるのです。だけれども、そこにこだわってしまっただけは、少なくとも子供についての議論、コミュニケーションすら始まらないということになります。何かもう少しそういうところで大らかさというか、表記の呪縛みたいなものから逃れられるような提言はできないのかなということもあります。

例えば、ダウン症のダウンというのは医者から取っているのですが、アップダウンのダウンと捉えて、これはイメージが良くないから変えてほしいと言う。そういう方もいらっしゃいます。気持ちはとてもよく分かるのですが、そういうところになってしまうと、コミュニケーションは進まないという気がします。何とかならないかなと思います。もちろん、言葉を変えることによって変わるということもあります。障害も、「害」の字を使わないことによって、意識が変わる、社会が変わるとする見方もあるでしょう。それも確かに一理はあります。

○沖森主査

ほかにございませんでしょうか。ではこの辺りで意見交換を打ち切りたいと思います。まだまだ言い足りなかったこと、後でお気づきになったことなどもあろうかと思えます。そうしたことがありましたら、事務局までメールやファックスでお伝えいただければと思います。よろしくお願ひします。

10月31日に、国語分科会の総会が予定されております。その場で今期、この小委員会でこれまで審議していた状況を報告しなければいけません。これまで御意見を発表してくださいました7名の委員の方々、その御提言を紹介しながら、そこで出された様々な意見を整理した形で報告したいと思っております。そのような形で報告してよろしいでしょうか。よろしいということであれば、報告の具体的な内容と配布資料等については、私に御一任いただきたいと思います。（→了承。）

どうもありがとうございました。それでは、31日の報告については、今後、森山副主査及び事務局と相談しながら準備をさせていただきます。

本日御発表くださいました山元委員、関根委員には改めて感謝申し上げます。どうもありがとうございました。また、意見発表につきましては、今後も事務局と相談して、お願いさせていただきます。ただ、この場での意見発表を希望される委員の方がいらっしゃれば、是非とも事務局まで御連絡いただきたいと思います。

それでは、以上で本日の国語課題小委員会を終了いたします。

御出席くださり、どうもありがとうございました。